燕石十種　第四輯　近世江都著聞集　（国立公文書館　蔵）

三浦抱遊女薄雲か伝

晋其角句　京町の猫かよひけり揚屋町

此句ハ春の気にふれて猫かよふとハ申まし 猫サカル 猫コカルヽ 抔と書たるハ春の気に
入て殺すと京町の猫とハ遊女をねこと見立てよめるすがたとハきこへ
るときこゆれども今其角流の誹諧ハ人を意匠に比しらる
ハ凡風体にかゝわらず殊さず此句ハ元禄の頃ハ太夫格子の京町三浦
の女郎ハ揚屋入の付禿に猫をいだかせしハ薄雲を始て
寵愛しよりすべての遊女猫をだきて行を道中に出たり揚屋
入をせる事を其頃のすがたにて京町の揚屋へ通ふと風俗
にいひなせる句なるべし其頃太夫格子の禿に猫を抱かせ道中せし
根元ハ三浦屋四郎左衛門の抱への薄雲といふ遊女也此者の縁と
聞とりてかまはし人の知る事也元禄の薄雲と云ハ代々付し名
なり元禄七八の頃より十二三年くわしく三代薄雲となびし女
なり

先年板本に小冊傾城をうけたる書あり絵板本にて今に
誠をかくしたる

此うす雲ハ毎年三毛の小猫をかハゆがりしきたひちりめんの首玉
を入金の鈴を付て寵愛しけるが程なくその頃の人々口すさミにいふ
女三の宮の姿もかくハありしと申ならはしそれを申ける
うす雲ふとしたる事によりつきしね一足も放さず側をもはなれず猫
寝る床も行時もくろどら春の夜のうかれ猫の妻乞声
もきこへ出ず兼て世を去られず神妙よいと思ひしと薄雲ハ
猶ひなお寵愛しきり大小用の度かぶやへ此猫を抱て
側をもはなれず ひとゝせ厠の内へふと入りてハなすきしこゝぞんうし
御しひ禿ハ覚是非に…して厠をも怪れける人々之事頃
いひしにそうき名を立ていひふるハいゑし其より猫ハ陰獣なる

しても魔鬼をなすものゝと落雲より容色かはりしさまを
猫乃見入しなるらんと一人云出すとこに傍人数の皆われも
見うすされ猫とふ見入たりといひあへす三浦のわれや
ある耳に入て落雲を見して古へより老猫は化ると
吾か忘られずはまり猫を愛し斯事なりけれとて落雲
今の猫かりふおそろしくかはり寵愛たてまつりけれとも
猫ハいつぞうすくも落雲をつひまとわれず人々是を追拂ひ給へば
只うれしげふなきさけび其枝の中よりも薄雲がひざもと
を離る事を悲しひたりとふ厠へ大小用の度ごふ猫もつき
行けゆへ人々彼を追ものしけれ共つひ来る是いかゝ此
猫こハ見込しと家内の者より猫ひ不絶打殺し給へ今て
あるを居りしが或時うす雲まふ用事ありて雪隠へ行し
をいつもよりかこの猫来つゝて同しく厠へ入らんとするを家
内の男女追うけ其ちらさんとするに戸口へ入らんとするを亭
主わきざしをぬひて其うけしに猫の首を水もたまらず
打落すに首飛んで厠よりゆくふで猫の胴は戸口ふ残り
首は見えざる方にお落ちけれバ厠の下すみのかたふ大きなる蛇乃
住居して居たりしに其蛇へ件の猫の首喰ひ付て蛇を
くひ殺して居たり人々是を見て身をすて感したりけん
是ハ此地の厠に住て薄雲を見こみしを知らざりしこそなき
猫の心を不忠たる猫を殺しけること甚怨たり日頃寵
愛しかふか猫ハ主恩を感じて如此なさけ心根を考
ずし殺せし事の残念さよといつまでも感を得したり落
雲ハ程もふ便のいかましく洞を流し侍る其猫のからを道場
にをさめて猫塚と云は是なりして揚屋のならひの往女ハ多くハ猫を
飼兎よ持せて出る事ハなかりし此所風俗なりたり

（二）古今比売鑑　薄雲

太田記念美術館　蔵

月岡芳年　画

笄も着物の柄も猫づくし